

【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵

「関八州大絵図」について

根本 佐智子

【キーワード】

大型肉筆絵図、河川絵図、椿海、利根川東遷事業、承応～寛文期

【要旨】

本稿は神奈川県立歴史博物館所蔵「関八州大絵図」について紹介し、類似絵図との比較を行い、その景観年代の考察を試みるものである。

「関八州大絵図」は多くの情報が記された河川絵図であり、江戸時代初期の承応三年～寛文三年の様子を描いた貴重な絵図あること、類似絵図と比較することにより、作成者または作成依頼者は、水戸藩に縁をもつ人物で、水戸街道をあえて主要街道として書き加えていることなどを明らかにした。

はじめに

神奈川県立歴史博物館所蔵の「関八州大絵図」^①（以下「大絵図」と略す）は、昭和六十二年（一九八七）の受け入れ以来、巨大な絵図であるために展示することができなかった。しかし、この度、平成三十年（二〇一八）の再開館に合わせて展示台が作成され、初めて公開することができた。本稿はこの「大絵図」について紹介し、今回の調査によって確認した類似絵図との比較を行い、その景観年代の考察を試みるものである。

一 関八州大絵図の特徴

「大絵図」は、本紙寸法が一八八三mm×二〇九〇mmの大型肉筆絵図であり、伝来は不明であるが、原図を写し、作成されたものと考えられる。縦五枚、横八枚＋半端一枚の紙を貼り継いだ紙に描かれ、折図として保管されていたようであるが、現在は裏打ちされている（図1）・（図2）。

描かれる範囲は江戸を中心に関東八州（相模・武蔵・安房・上総・下総・上野・下野・常陸）・伊豆・駿河（沼津・富士山まで）・甲斐・信濃（千曲川水系・黒姫山まで）であるが、伊豆・安房の一部が不自然に欠けており、画面下方の紙一枚分が欠損していると考えられる。

墨書きされた絵図に青（海・河川）、緑（山・植生）、赤（道）、黄（国名部分）、白（河川や湖沼色）を使い彩色されているが、村名・城・城下町名、各所の寺社を描いた図像には彩色が施されていない。国境を黒い太線で表すが、陸奥・越後との国境、伊豆・駿河の国境は記されていない。

村名を小判型の中に記すことや、城・城下町名（藩名）^②を□で囲う城

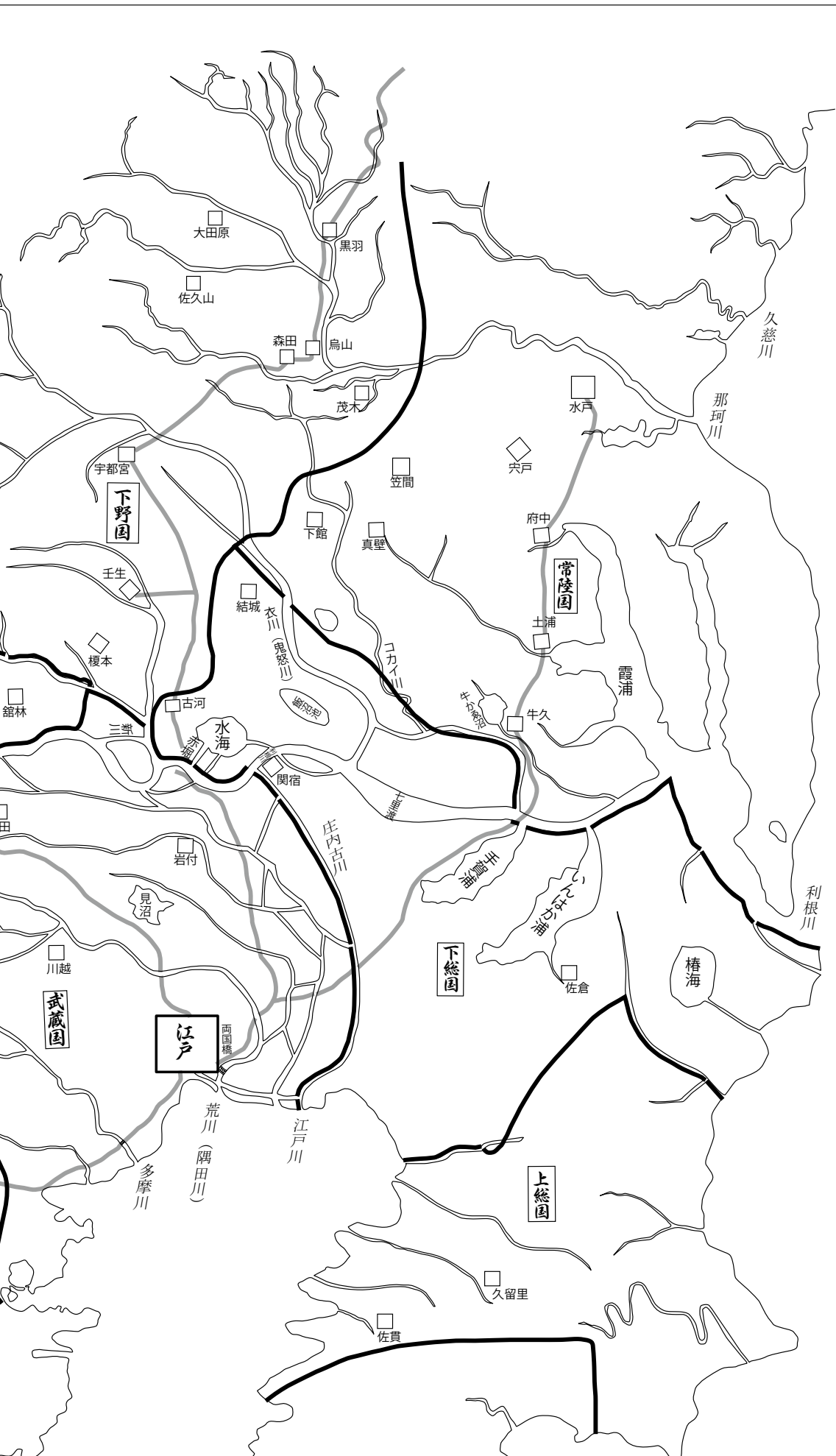
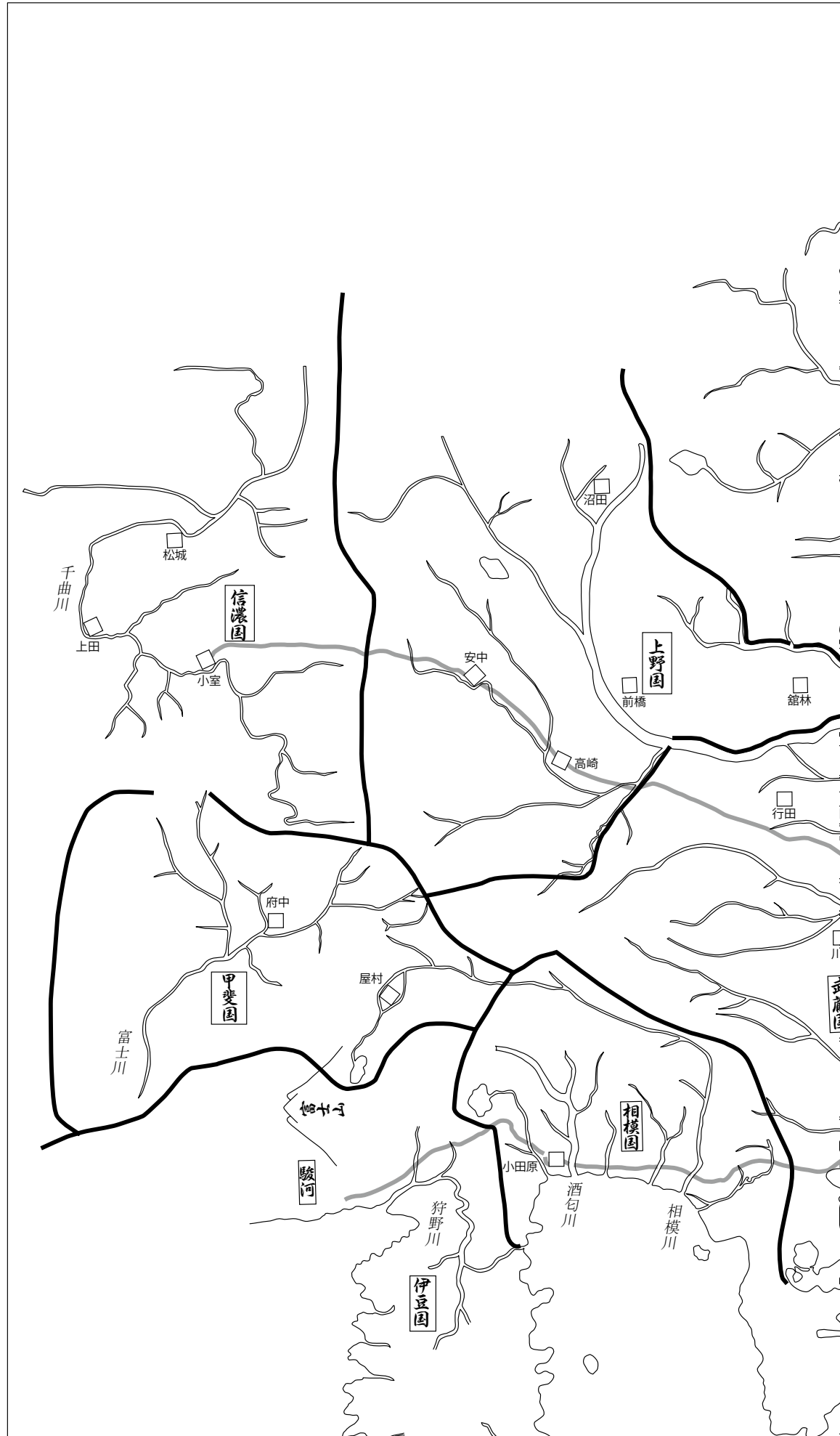


図1
関八州大絵図トレース図
(河川・城形図式・主要街道)

■ 主要街道

斜体の文字は
筆者加筆したもの



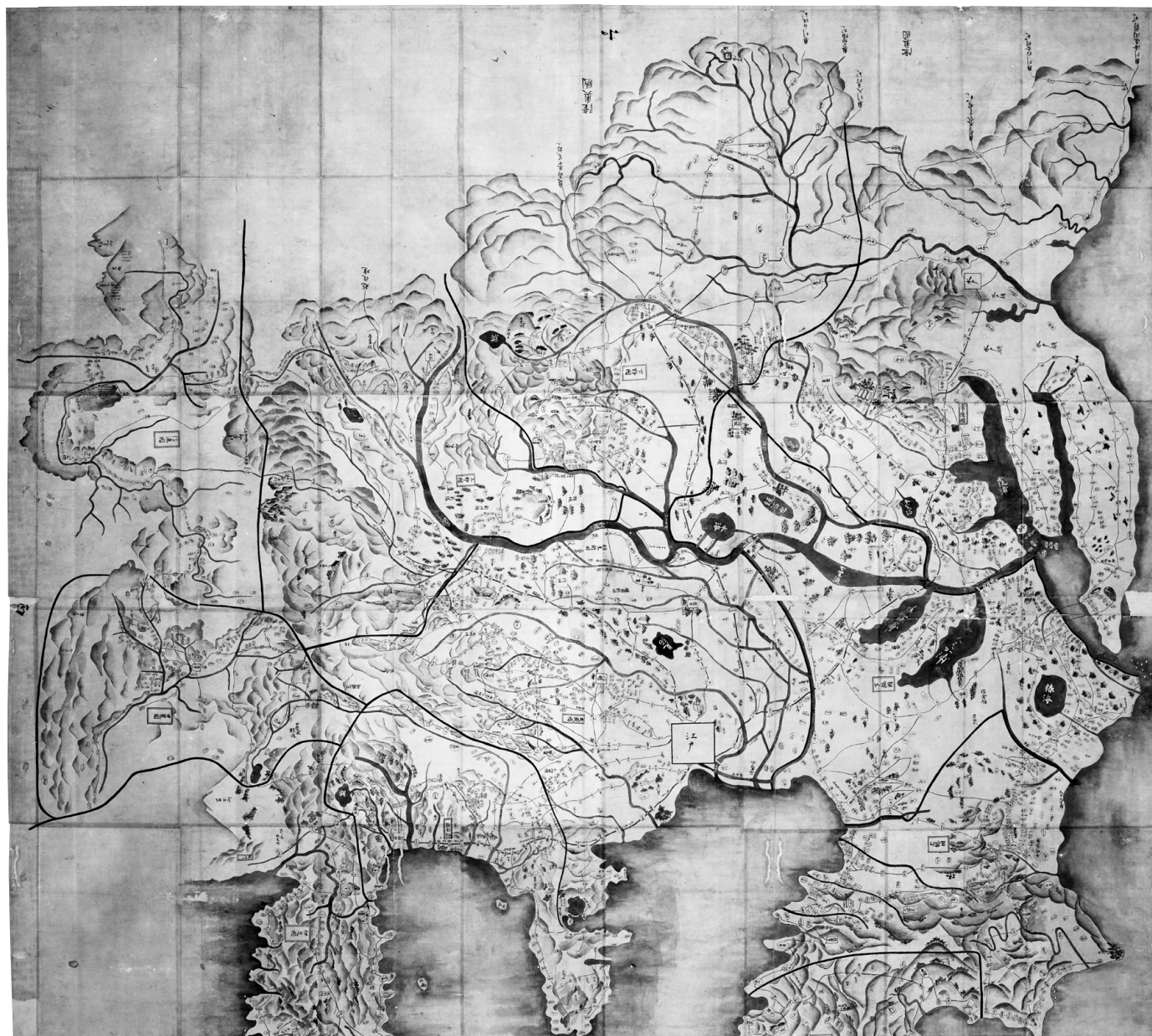


図2
神奈川県立歴史博物館所蔵 関八州大絵図

形の図式は国絵図の様式と類似するが、全ての村名を書き上げるのではなく、街道沿いの村を中心に記している。一方で、街道沿いではない周辺の村々も詳細に書き込んでいる地域もあり、表記には差がみられる。その他「古城有」といった名所旧跡の情報や、山の詳しい名称・金山・銀山等鉱山名の書込みも各所に見られる。

街道は細い朱線、五街道などの主要街道は太い朱線で示している。主要街道の脇には宿場間の距離も記入されている。主要街道のルートを見ると、中山道は追分より北国街道へ入り小室（小諸）―上田―松城（松代）へと続く。また奥州街道は宇都宮―大田原ルートではなく、宇都宮―烏山―黒羽―白河の関へと続く関街道が太線で示される。甲州街道に至っては、高井戸以降は細線となっているが、それに対し、五街道ではない水戸街道が太線で記されている。水戸街道を太線で表していることで、この絵図の作成者（写しの作成者や発注者）が水戸藩にゆかりのある人物であることが推測できる。

「大絵図」は、各国の河川を詳細に記しているのが特徴と言える。特に利根川水系を中心に太く、霞ヶ浦周辺が香取海のように大きく描かれており、河川・湖沼の名称なども詳しく記している。関八州の利根川をはじめとする主要河川の水系を描いた大型絵図の総称を「関東川々絵図^③」といい、利根川治水の基本図となっていたが、「大絵図」は「関東川々絵図」の範囲を超え、信濃国千曲川水系、常陸国那珂川水系・甲斐国富士川・伊豆国狩野川まで広範囲に描いている。このことから、「関東川々絵図」とは目的を異にして作成されたものと考えなくてはならないだろう^④。また一方で、常陸・下野・上野・信濃の陸奥・越後との国境が描かれておらず、国絵図や日本総図のように国全体の形を描くことを目的で作成されたものとも考えにくい。この絵図は関東周辺諸国の河川



図3 臼杵市教育委員会所蔵 資料番号 307「武蔵常陸甲斐信濃上野下野上総下総安房相模伊豆」写真提供：臼杵市教育委員会

を描くことを目的に作成された「河川絵図」の一種であると考えられる。数多くの河川を描いているが、描かれた橋梁は両国橋・六郷橋のみである。

二 類似絵図との比較

大分県臼杵市の臼杵市教育委員会が所蔵されている「武蔵常陸甲斐信濃上野下野上総下総安房相模伊豆^⑤」（資料番号 307・②―①の二点^⑥）。以下「臼杵本」と略す）という同名の資料二点は、「大絵図」と構図が大変よく似ており、描かれている範囲、国境・川・湖沼の表現や、村名を小判

型の中に記すこと、城形もほぼ同様で、同じ原図を写し作成されたと思われる絵図である。

寸法も一点は一九四〇mm×二二〇mm(資料番号307)(図3)、もう一点は一八八〇mm×二一〇mm(資料番号②-9)であり、「大絵図」では欠損していた伊豆・安房の一部も欠損なく描かれている。伊豆・安房の一部が欠損した状態で「大絵図」とほぼ同寸であり、作成時は「臼杵本」二点より「大絵図」の方が大きく描かれた絵図であったと考えられる。

さて、「大絵図」と「臼杵本」との相違点を見てみたい。「大絵図」が墨書きのみであったのに対し、「臼杵本」は小判型で記された村々が国別で黄・赤・薄桃色で彩色されている。また鳥居や寺社の建物といった図像にも彩色が施されている。しかし、「大絵図」に多くみられる林や樹木といった植生は一切記されていない。

街道は、「大絵図」では太い朱線と細い朱線で主要街道か否かを表したが、「臼杵本」では江戸を発し、所沢方面へ向かう一本の太い朱線が見られるのみで、他の主要街道も全て細い朱線で描かれている。「大絵図」で太い朱線となっていた牛久—土浦—府中—水戸を繋ぐ水戸街道は、涸沼手前で途切れ水戸へつながっておらず、城形図式で記された府中、土浦の二城は記されてもいない。

その他に「臼杵本」は、下総・武蔵の国境である庄内古川・江戸川に国境の太線が入っていない。関宿対岸の「水海」から出る「赤堀」〔こてさし堀〕の二堀が描かれていない。那須の殺生石、関宿の宗寧寺が描かれていないなど、全体的に「大絵図」よりも記述が少なく、細部を省略した絵図のような印象を受ける。河川の表現を見ても、下野国那珂川の上流、大田原以北などは紙面の関係上短く省略しているかのような描き方をしており、山も描かれていない。古河が下野国に含まれていると

いった誤りも見られる。橋梁も、千住大橋を朱で描くのみである。

三 両絵図の景観年代について

「大絵図」と「臼杵本」は、おそらく同じ絵図をもとに作成された写しであると考えられることは先に述べたが、どちらがより原本の絵図に近いものであるのかは窺い知ることができない。

簡略なものに加筆したものか、詳細なものから必要な情報だけを描きぬいたものであるのかは、原本資料や他の類似資料が発見されぬ限り判断することは難しい。したがって、本稿では、両絵図の景観年代を考える際には、まずは両者共通に記されている情報を基本として考えたい。

「臼杵本」は、『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』^⑩において、寛永国絵図系統の地方図の解説の中で、「寛永『日本総図』から該当する箇所(関東および隣接する周辺国)を切り取って写された絵図ではないか」とされ、また同報告書掲載の絵図目録には「臼杵本」の概要として、「樺海と刑部川(下総)が描かれていることから、景観年代は寛文十年頃か。」と記されている。

一方で川村博忠氏は『国絵図の世界』^⑪において「臼杵本」を取り上げ、上野沼田城に「真田伊賀守」、信濃松城(松代)城に「真田伊豆守」と領主名が記されていることから、作成年代が万治元年(一六五八)〜天和元年(一六八一)の間に作成されたと推定できること、また大多喜城が城形図式で記されていないことから大多喜城が廃城となっていた元和十年(一六二四)頃〜寛文十二年(一六七二)の五十年間の間であるとされ、両者を許容する期間である万治元年〜寛文十二年のわずか十二年間を作成期間であると推定された。

さらに川村氏は、大分県立歴史博物館の企画展図録『殿様のコレクション』



図4 「関八州大絵図」椿海部分

ことがわかること、江戸幕府の日本総図集成には、それに先だつてこのような地域ごとの寄絵図が作成されたと解説されている。

「大絵図」にも描かれている椿海(図4)は、下総国香取・匝瑳・海上の三郡にまたがる東西十二km、南北六kmの湖であったが、寛文十年に開始された干拓事業により「干潟八万石」と呼ばれる新田へと姿を変えている。刑部川(堀)とは、椿海の水を抜くために整備された排水路の名称である。⁽¹³⁾しかし、『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』が刑部川とした川は、「正保国絵図」⁽¹⁴⁾にも描かれており、椿海干拓前から川は存在したと考えられる。⁽¹⁵⁾そのため、景観年代は、寛文十年と限定することはできず、川村氏のように、寛文十年以前の姿と考えるべきだろう。

景観年代がどこまで遡ることができるのかについては、川村氏の指摘される大多喜城の城形図式が無い点は共通するが、沼田城主・松城城主の記載は残念ながら「大絵図」にはない。両者に共通する画像としては、利根川が銚子へ抜けていることがあげられるだろう。利根川の東遷事業は、江戸初期から幕府によって行われた大規模な土木事業であり、江戸湾へ注いでいた利根川の本流を、幾度かの瀬替工事の末に常陸川筋を経て太平洋へと流す事業であった。⁽¹⁶⁾承応三年(一六五四)の赤堀川増掘削

ヨシノ「臼杵藩と絵図」⁽¹⁷⁾に掲載された「臼杵本」の解説において、関東地方十一ヶ国の寄絵図(地域図)であること、前に示された沼田城主・松城城主の治世の時期と、下総の椿海が描かれていることから干拓前であり、寛文十年(一六七〇)前である



図5 「関八州大絵図」宗寧寺部分

通する画像にみる景観年代は、承応三年〜寛文十年の十六年間と考えられる。

一方で、「大絵図」だけに描かれた画像であるが、下総関宿に総(宗)寧寺が描かれている(図5)。総寧寺は寛文三年(一六六三)に洪水の難を避けるため下総国府台に移転しており、関宿に描かれているということは寛文三年以前を示していると考えられる。⁽¹⁸⁾「大絵図」の景観年代に関しては、利根川東遷後の承応三年以降、総寧寺が移転する寛文三年以前の様子を描いていると推定することができる。

おわりに

本稿では「大絵図」について描かれている画像の特徴などを紹介し、類似絵図である臼杵市教育委員会蔵絵図との比較、景観年代の推定を行った。

今回の調査の結果、「大絵図」は河川絵図であるが、その他にも多くの情報が描かれていること、江戸時代初期の承応三年〜寛文三年の様子を描いた貴重な絵図であることが判明した。「臼杵本」と双方を比較することにより、「大絵図」の作成者または作成依頼者は水戸藩に縁をも

により、栗橋から関宿へ向けての通水が可能となり、利根川東遷事業は完成する。双方とも利根川は銚子に向けて流れており、⁽¹⁹⁾承応三年以降の様子を描いていると見てよいだろう。「大絵図」・「臼杵本」双方に共

つ人物で、水戸街道をあえて主要街道として書き加えていることなどを明らかにすることができた。「大絵図」に墨書された寺社の絵や小判型の村名などが、「白杵本」のように本来は着色されていたと考えると、原本は大変華やかな印象の絵図であつたと想像できる。

様々な要素を含んだ絵図であるため、今後大いに活用するとともに、白杵本の他にも同様の絵図があるか調査を続けてゆきたい。

註

- (1) 「関八州大絵図」とは資料受入時に付けられた名称で、後述の通り関東八ヶ国のみを描いた絵図ではなく、名称と図像に齟齬がある。
- (2) 城を持たず、陣屋で政務を執った藩を含む。
- (3) 橋本直子「近世く近代における河川絵図の研究」(平成十六年度河川整備基金助成事業助成番号二〇〇四—一六—二二〇〇四)、では明治大学図書館蔵田文庫所蔵「関東川々絵図」をはじめ、十九点の「関東川々絵図」が紹介されている。
- (4) 『絵図学入門』(東京大学出版会 二〇一一)。
- (5) 前掲橋本論文によると、「関東川々絵図」の成立は十八世紀中期以降であると考えられ、後述する「関八州大絵図」の景観年代とは開きがあり、当該図は「関東川々絵図」には当たらないようである。
- (6) 白杵市立歴史資料館データベース 資料番号307および②—9の二点。
- (7) 『白杵市所蔵絵図資料群調査報告書』によると「同じ図柄」とある。
- (8) この線は甲州街道ではなく、甲州街道は太線の下方に描かれている。甲州街道の宿場である武蔵府中が城・城下町ではないが、□で記されている。
- (9) 「関八州大絵図」では大山沼・釈迦沼・永井戸沼等を一つの「水海」として描き、利根川東遷事業の際に開削され(通水は承応三年(一六五四)、その後利根川の本流となる赤堀川(備前堀)をその「水海」から流れ出る堀のように描いている。ちなみに、赤堀川と同様利根川東遷事業のために元和七年(一六二一)

に開削された新川通も描かれているが、利根川本流とはなっていない。また、同様に開削された江戸川(寛永一七年(一六四〇)開削)は描かれていない(国境となっている川は庄内古川である)。

- (10) 上原秀明「諸国国絵図」「白杵市所蔵絵図資料群調査報告書」(白杵市教育委員会 二〇〇五)。

- (11) 川村博忠「安房国・上総国—主要大名のいない地域の国絵図」『国絵図の世界』(国絵図研究会編 柏書房 二〇〇五)。

- (12) 企画展図録『殿様のコレクション—白杵藩と絵図—』(大分県立歴史博物館 二〇〇五)。

- (13) 『千葉県の歴史 通史編 近世二』(千葉県 二〇〇七)。

- (14) 国立公文書館所蔵『近世絵図地図資料集成 第十五卷(フルカラー版)』正保国絵図集成・東日本篇』科学書院 二〇一〇)。

- (15) 匝瑳郡と海上郡の郡境にもなっていた。

- (16) 企画展図録『利根川東遷と関宿藩』(千葉県立関宿城博物館 二〇〇六)。

- (17) どちらの絵図も、大越—栗橋間の新川通が「新川」と記され描かれているが利根川本流になっておらず、江戸川が描かれていないなど問題点もあり、また、「大絵図」では赤堀川が「水海」の堀のように描かれるなど、利根川東遷事業については全てが正確に描かれているわけではない。

- (18) 『角川地名大辞典12 千葉県』(角川書店 一九九二)。

【付記】

「白杵本」の図版に関しては白杵市教育委員会にご提供いただきました。記してお礼申し上げます。